

子どもたちの願いと「包み込まれている感覚」

井戸 仁(本学教職研究科准教授、学校心理学、理科教育学)

1 子どもたちの実態

「先生!葉っぱの下にこんな小さい虫がいるよ!」
とルーペをのぞき込みながら感嘆する子ども。

これは先日行われた、理科実験教室での一幕である。

「最近の子どもたちは、昔と違って・・・」とよく言われるが、本当に子どもたちは、変わってしまったのだろうか?

たしかに、現在は都市化や少子化等社会全体が変化し、人と人とのつながりが希薄になってきている。そして、子どもたちを取り巻く環境の変化により、子どもたちの本当の姿が見えにくくなってきているのは事実である。しかし、子どもたちの感性や願いは、変わっていないのではないだろうか。

理科や数学に係る子どもたちの興味や関心については、別の機会に述べることにするが、ここでは、なぜ今、子どもたちの感性や願いは変わっていないとは言いながら、友達の優しさや良さにも気付くことができず、学校や学級の中でも集団への適応がうまくできずにいる子どもたちが増えてきているのか。そして、自尊感情や自己肯定感が低く、自分を好きになれなかったり、自分に自信がもてなかったりする傾向があらわれ、様々な問題を抱える子どもたちが増えてきているのか。

本稿では、このような実態を踏まえ、教師は子どもたちとどのようにして向き合い、子どもたちとどのような人間関係づくりを構築させていけばよいかについて、学校現場を経験してきた者として、私自身の考えを述べてみたいと思う。

2 子どもたちの願い

昔から子どもたちは、「友達をいっぱい作りたい」「楽しく遊びたい」「授業が楽しく、わかりたい」「学校が楽しい」など、具体的なイメージをもち求めて

いた。しかし、今子どもたちはそういったイメージだけではなく、「心の豊かさ」をより強く求めているように思うのである。

子どもたちにとって、自己防衛が強く表れてしまいがちな環境というのは、学校が楽しくなく、安心して過ごすことに危機感を感じる環境である。そういった環境におかれた学校は「荒れ」が発生しやすくなり、子どもたち同士も傷つき合い、人間関係も崩れていってしまう。人間関係づくりを回復させるには、学校が楽しく、安心して過ごせる場所を提供することが必要で、そのような環境を作っていくことが我々教師の役目なのではないだろうか。自尊感情や自己有用感を高め、自分のことを好きになることのできる子どもを育成することが大切になってくると思うのである。

具体的には、子どもを「ほめる」こと、感動や感激を共有すること、そして、共に「遊ぶ」ことなのではないだろうか。冒頭のルーペでの観察の際に発せられた言葉を「チャンス」としてしっかり捉え、共感的にほめてあげて心豊かな時間を共有したいものである。

京都府教育委員会は「京都府教育振興プラン」を策定している。その中で、周囲からの愛情や信頼、期待などに「包み込まれている感覚」を持つことこそが安心や自信、誇りや責任感をもたらし、「未来を展望し」「自然、人、社会とつながり」「挑戦し続けて」いこうという意欲を引き出し、高めていくと記されている。まさに子どもたちの願いを実現させるためには、「包み込まれている感覚」を実感させることが、キーとなるのである。そのためには、人権教育を全ての教育活動に位置づけることを怠ってはならないと、私自身は常に念頭に置き教育活動を続けていきたいと考えている。